

平安時代の教育史を考え直す —藤原頼長の学問について—

ジリアン・バート*

1. はじめに

保元元年7月10日、源為朝が崇徳天皇に軍隊の夜の攻撃を申し入れました。後白河天皇の軍隊はその奇襲攻撃を予想していないからです。しかし、左大臣藤原頼長はこの予定を聞くと、断りました。白河殿の戦いで、平清盛と源頼朝が白河殿を攻撃して、崇徳天皇の軍隊が敗戦しました。

戦いの中、頼長は耳の下に矢を打たれました。彼の郎党がお父さんと会う為に奈良まで連れてきましたが、頼長の傷はとても深く被害は大きかったです。7月14日、藤原頼長は戦いによる被害のために亡くなりました。36歳でした。今日、頼長は保元の乱の事から覚えられています。その奇襲攻撃の事を断らなければ、もっと長い間生きていた可能性があります。しかし、彼の功績はその悪い決断から作られていました。「保元物語」と「愚管抄」という軍記物語によると、頼長は学問によって決断をしました。彼は「あまりにも賢い」ということが書かれています。しかし、保元の乱の評価のみで頼長の一生が評価されることには、疑問を感じます。頼長の学問は平安時代後期には特別なので、よく見ると公家の知的な人生や教育の実践が理解できます。

本研究で、私は藤原頼長の功績について調べてみたいと思います。「台記」という頼長の日記をよく見て、彼の学問から、頼長の功績を考えてみたいと思います。

2. 頼長の伝記

初めに、少し頼長の伝記を説明します。頼長は保安元年5月に生まれました。藤原忠実の次男で、藤原忠通の弟でした。頼長が生まれた時、忠実は関白と藤原の氏長者でしたが、1121年、白河上皇は忠実の娘と鳥羽天皇とを結婚させる希望がありました。忠実はそれを辞退しましたが、白河上皇の希望が強いので、結婚させました。その事のために、彼は関白を辞任しました。そして、頼長にはお父さんの影響が少ないので、子供の時にあまり公家のことについて考えなくて、多くの武道にとりくみました。

頼長が17歳の時、人生が変わりました。「台記」という頼長の日記の康治元年12月30日の記事で、頼長が子供の時の事故について書きました。

臂鷹鞭馬駟馳山〔野〕、騏驎電逸、殆及失命、依佛神之加被、纔雖存身、顧〔顔力〕疵猶在、引鏡見之、弥増貽〔子〕孫之誠忌。

現代語訳：は、「鷹犬（で狩猟を行うことや）、牛馬（に凝って遊ぶこと）、酒色（に溺れること）などについては、固く禁止する。私が少年であったとき、（父）禅閣の教えを守らず、鷹を臂に乗せて馬に鞭打って山野を駆け回っていたところ、駿馬（しゅんめ）が突然（私を）振り落とし、（私は）危うく命を失いそうであった。仏神の加護によって辛うじて命は助かったが、顔の傷は今もなお残っている。鏡を引き寄せて傷跡を見るにつけ、改めて強く子孫のために誠めを残そうと思うのである。」¹

*南カリフォルニア大学大学院生

3. 「台記」の記録について

この時から頼長は勉強を始めました。多くの公家たちは平安の大学を使いましたが、頼長は教師と自分で中国の本を読みました。康治2年9月29日、「台記」に本の読んだリストを記録しました。そのリストは頼長が1136年から1143年まで読んだ本を全部記録しました。リストで三つの分類を使いました。「經家」というのは儒教的な本で、特に大学寮と同じように大事な本でした。「史家」というのは中国の歴史でした。「雑家」というのは教育や文学や雑多な本でした。その分類に怪異文学もありました。リストの中に、千三十巻が入っていました。

少し記録の説明をします。全部の本は大体同じように書いていました。初めに、本のタイトルがあって、そしてどのぐらいの巻があるかが記されています。一部だけを読んだものは、備考に記載しました。何年のいつからいつまでに読んだかも書いています。誰と勉強したのかや、気になった事柄についても備考に記入しました。大体その簡単な記録のスタイルを使いました。公家の中に、頼長のように幅広い本を読んだ記録がないから、このリストを使うと、よく平安後期の知識層の生活が理解できます。

選んだ本は大体教師の影響で選びました。大事なことは特に經書とその評釈でした。頼長は和歌や詩歌が好きではなかったから、あまり和歌を読みませんでした。評釈だったら、たくさんの本を読みました。例えば、「春秋」と三つの大事な評釈を全部勉強しました。永治元年中、「左傳」と「公羊」と「穀梁」を読みました。「左傳」は卅巻で、「同釋例」という十六巻の左傳の評釈も読みました。同じように、「公羊」の十二巻と同じテキストの十二巻の評釈も読みました。そのパターンで、頼長はたくさんの本を自分で勉強しました。

その經書以外に、他の面白い本は特にその「雑家」の部分の本でした。普通の教育の為の本が

入っていて、例えば「蒙求」という本は子供が漢字を覚える為の入門書です。しかし、他の公家あまり読まない本も入っていました。例えば、「洞冥記」という中国からの短編集がありました。これは道教からの影響が入っている短編で、頼長の勉強の為たぶん大事な本ではありませんでした。けれども、頼長にとって全部中国からの学問は特別だと思って、そのために読みました。

4. 頼長と大学寮と比べて

頼長はそのリストの中から千三十巻を読みました。でも、他の公家に比べて、選んだ本は教師と自分で選んで、平安の大学寮を使えませんでした。頼長の個別の学問について説明を続ける前に、少し平安の大学寮について比べたいと思います。大学寮という制度は様々な律令の文書に説明されており、その中でも最も古い文書は670年の近江令でした。701年の大宝令はその制度をもとに、中国にならった日本の公務員試験の制度を作りました。大学寮制度の多くの情報は757年の養老律令に書かれています。

大学で主に教えられたのは經書でしたが、他の様々な課程も教えられていました。例えば、数学、書道、音声学や薬も教えられていました。専攻によって科目の内容は異なりました。律令から經書の科目には論語、孝經、鄭箋、書經、易經、春秋、と礼記を読まなければいけません。本来は一人の博士と二人の助手が教えて、そして二人中国の音の読みの博士と二人書道の博士がいました。代わりに博士一人と時々一人の助手と成績上位の卒業生四人が授業を教えました。

經書を勉強している学者はシンプルな教案を使っていました。音声学の博士は学生に文書の読み方を教えました。その読み方は大抵朗読でした。読み方を勉強した後、毎日經書の博士が教える同じ文書についてのゼミに入りました。十日後、学生はその文書について試験を受け、その次の日

は休みます。

言うまでもなく、頼長は大学で勉強しませんでした。従って、彼は大体経書の科目と同じように本を読みました。弥吉光長という歴史家について、頼長は大学寮の学生に比べて殆ど五十パーセント少ない時間で本を読みました。例えば、「詩経」を読む時、頼長は二百六十五日ぐらいで本を勉強しました。大学寮の学生は同じ本を読む時は四百八十日ぐらい本を勉強しました。でも、「論語」の場合は、頼長は六百五十六日ぐらい勉強して、大学寮の学生は二百日だけで勉強しました。

そして、大学寮と違って、長い間経書の評注を勉強しました。例えば、リストによって、保延6年に「書経」の十三巻を読みました。次の年、「同音釋」の二巻を読んで、それは書経の評注でした。次の年、「同正義」の二十巻を読んで、それは別の評注でした。殆どの経書と同じように、その長い批評のことをたくさん勉強しました。彼は経書について徹底的に学びました。

5. 勉強の方法

どうやって頼長が勉強したかについては、その日記から理解できます。康治2年3月30日に、『春秋正義』を読む過程が少し説明されています。

「三十日、＜丁亥＞春秋正義卷第十八了、酉刻、此間終日見正義、＜案義之間、不過一卷半分、＞飲食時、以生徒使南史〔語脱力〕、予仰生徒令抄進之、専学経不暇学史、飲食時徒移光景、仍其間使語南史、生徒・吾語三遍。」

現代語訳：「『春秋正義』第十八巻を食事の間に、生徒に『南史』を音読させることにした。前もって生徒に命じて抜き書きを用意させた。もっぱら古典を学び、歴史書を学ぶ暇がなかったが、よく考えてみると、食事の時には、無駄に時間を過ごしている。そこで、その間に『南史』を音読させるのだ。生徒と私それぞれ、三度音読する。」²

この記事から、頼長の学問の過程がよく理解で

きます。勉強の時、やはり本を読みましたが、テキストの意味を考えすぎて、早く読むことができませんでした。今回は、半分の巻が読めませんでした。真面目過ぎて、食事をする間も勉強のことばかり考えています。

そして、この記事から学生のことについて知られます。あまり頼長と学生について知らないのですが、やはり大学寮の学生を教えました。その記事から学生は大体頼長の学問の事を手伝います。例えば、食事をする間一人の学生は本を読んで、頼長がその本の事を聞いて、まだ勉強できません。大学寮と同じように、頼長にとってその朗読は大事だそうです。学生だけではなく、頼長も朗読をして、いつも練習しています。頼長は大学寮の方法を少し使いましたが、彼らにとってその施設は必要ありません。却って、自分でもっといい学問の生活を作ろうとしたようでした。

6. 頼長の図書館

勉強以外に、やはり頼長にとって大切な物は自分の図書館です。天養2年4月2日、自分の「文倉」という図書館を構えました。文倉は同じ年の正月に依頼して、三月中に建てました。文倉の説明は徹底的です。頼長の家の土地に建てて、高さは一丈一尺、東西は二丈三尺、南北一丈二尺です。その場所には約八十四平方メートルに本が入ります。

本を入れる時に大事な位置付けをしました。初めに、目出度い日と時間を選んで、儀礼的な仕事をしました。頼長は略礼服を着て、「春秋」の評釈が入っている木造の箱を持って文倉に入りました。東と西の壁に棚があって、東の棚は「陽」という名を使って、西の棚は「陰」という名を使いました。「春秋」の箱は陽の棚に入れました。次に、頼長の仲間は「易経」と「詩経」という本が入っている箱を持って、陰の棚に入れました。其の箱には水路についての本も入っていて、其れは図書

館の洪水を防ぐために入れました。

箱の組織以外に、頼長の本で四つの分類を使いました。前に説明したリストと同じように、「全経」と「史書」を使いました。「雑説」という新しい種類は大体「雑家」と同じように、特に中国の文学が入っていました。そして、「本朝」という日本で作った本の分類もありました。その分類はリストにない種類であることから、その時から頼長はもっと日本で書いた本を読み始めました。彼は大体経書以外の本を読んでいませんでしたが、公家の人生の為に、その「本朝」の本は必要になると思います。

自分の学問以外に、宮廷の仕事も続けていました。1149年、彼は左大臣になりました。その役職から「悪左府」というあだ名をもらいました。1155年に、彼の人生は内乱のせいで変わりました。

7. 保元の乱と頼長の遺産

1155年に、近衛天皇がなくなりました。天皇の死から継承の紛争がありました。鳥羽天皇の息子は次の天皇を決めましたが、後白河天皇が玉座に上りました。1156年7月に鳥羽天皇が亡くなって、崇徳上皇が軍隊を集めました。内乱で藤原家と源家と平家が戦いました。でも、藤原家は皆同じ側を選べませんでした。確かに、頼長のおおさんは後白河天皇の側を選んで、頼長は崇徳上皇を支持しました。保元の乱は「保元物語」という軍記にえがかれ頼長の業績についても記されました。

「保元物語」の中に、頼長の知的な側面についてはコメントされていました。しかし、それはいいコメントではありません。一例を紹介すると、藤原通憲という頼長の教師が頼長と話しています。其の時、頼長は24歳で病気を患っていました。彼を元気づけるために、通憲は占術についての話をします。頼長は甲骨文の占術が一番いいと言いましたが、通憲は占筮の法がいいと思いました。頼長と揉めていましたから、経書を使って議論を続

けました。長い間の後で、通憲が諦めました。彼は次の事を言いました：「今となってはご学問は天下を越えております。これ以上ご学問なさいますな。もしそれでもなさるのでしたら、きっとその身にたたることでしょう。」ここから、通憲は他の大多数と同様に、頼長の知的な側面について消極的な意見であったことがわかります。

通憲の警告は勉強についての却下ではありません。実のことを言うと、頼長の態度への警告でした。頼長はいつも自分の教養を見せつけて、優位性を誇示しましたから、悪い評判を受けていました。

本稿の初めで保元の乱の白河殿の戦いについて説明しました。頼長は自分の学問から夜の攻撃のことを断りました。戦いの中、頼長は耳の下に矢を打たれました。四日後に、36歳で亡くなりました。頼長の功績は、「保元物語」という軍記物によって評価がなされてきました。頼長の功績は保元の乱のために負のイメージばかりが強調されてきましたが、学者として秀抜な一面もあることを忘れてはいけません。

8. おわりに

私の研究は藤原頼長の学問についてですが、今頼長の名前を聞くとやはり保元の乱のイメージを思い描きます。でも、日本の教育史やその教養的な側面から頼長を考えると、違うイメージが出来ます。欧米における研究では平安時代の文化財を勉強している研究者は多いにもかかわらず、平安時代の教育制度はあまり研究されていません。律令から公家の大学制度の機能がわかりますが、実際にその制度がいつも反映されていたわけではありませんでした。平安時代の終わりに、大学制度は下降の一途を辿り、公家の多くはその制度を使いませんでした。それにもかかわらず、公家たちの教育のレベルの高さはたくさんの文書や文学から測ることができます。

平安時代の公家たちの教育制度はもともと複雑なシステムでした。従って、頼長のような学者の人生を勉強すると、もっと平安時代の公家たちの世界が理解できます。これから私は頼長の日記や人生から学問の活動について考察し、学術的な側面から、頼長の研究を進めていきたいと考えています。リテラシーと教育は公家にとって大事なことでしたから、私達はもっと研究を深めていかなければいけません。そうすることで、藤原頼長に関する再評価を進めていきたいと思っています。

注

- 1 この翻訳は南カリフォルニア大学のPPJS翻訳グループと一緒に作りました。<http://www.uscppjs.org/>
- 2 この翻訳は2019年南カリフォルニア大学の漢文ワークショップで作りました。<http://www.uscppjs.org/translation-archive/2019/8/2/taiki-kji-2-1143-330-and-1117-entries-on-studying-history>

参考文献

- 橋本義彦 『藤原頼長』 (吉川弘文館、1964年)
- 弥吉光長 「日本古代の読書法－藤原頼長を中心として」 第20巻1号『読書科学』 (1976年6月)
- Borgen, Robert. *Sugawara no Michizane and the Early Heian Court* (University of Hawaii Press, 1994年)
- 井上光貞 『律令』 (岩波書店、1994年)
- 柳川響 『藤原頼長：「悪左府」の学問と言説』 (早稲田大学出版部、2018年)